

## 第4章 発生予察効率化調査

### 1 薬剤感受性検定

#### 1) イチゴ炭疽病菌のQoI剤に対する耐性菌発生状況調査

##### (1) 目的

イチゴ炭疽病は、育苗期後半から本ぼ定植後に多発し、苗や定植株に立枯症状を引き起こすいちごの重要病害である。近年、本県においても育苗期後半～定植直前の本病の発生が増加傾向にあり、苗不足や減収による甚大な被害が生じている。また、QoI剤（アゾキシストロビン水和剤）は、基幹薬剤として広く使用されており、平成21年に県内で耐性菌が確認されている。そこで、本剤の防除効果を明らかにするため、本剤に対する耐性菌の発生状況を調査する。

##### (2) 材料および方法

###### ①供試菌株

県内28地点の発病株から、組織分離及び単孢子分離によって得られた56菌株

###### ②検定方法（PCR-RFLP）

『植物病原菌の薬剤感受性検定マニュアルⅡ』（日本植物防疫協会、2009）に従った。各菌株をPDB培地で前培養後、菌体からMagExtractor-Plant genome kit（TOYOBO）によりDNAを抽出し、PCRのテンプレートとした。PCRにはGCCBF1及びRSCBR2のプライマーセットを用い、得られた増幅産物を制限酵素（Fnu4HI）で処理し、切断の有無から耐性菌を判定した。

##### (3) 結果および考察

PCR-RFLPによる検定の結果、供試した56菌株のうち50菌株においてQoI剤耐性が認められ、県内で発生した炭疽病菌のほとんどが耐性菌であった（表）。今回の検定結果と平成21年（2009）に実施した検定結果を比較すると、QoI剤耐性菌率は高くなっており、QoI剤耐性の炭疽病菌が優占し、県内に広く分布していることが明らかとなった。

表 イチゴ炭疽病菌のQoI剤耐性菌率（%）の比較

検定実施年	H26(2014)		H21(2009) <sup>※</sup>	
	H25、26(2013、2014)		H21(2009)	H11(1999)
菌株採集年				
供試菌株数	56		30	14
耐性菌率(%)	89.3 (50/56)		76.7 (23/30)	0 (0/14)

※H21(2009)年の検定では、H21年およびH11年に採集した菌株を供試。